明治学院大学『国際学研究』第 43 号, 109－111, 2013 年 3 月

【書　評】

原 武史著『団地の空間政治学』

NHK 出版，2012 年 9 月，290 頁

戸　谷　　浩

予め述べておけば，評者は著者と同じ年の生まれではあるが，育った環境は大きく異なり，東京西郊の団地で少年期を過ごした著者に対して，評者は上京するまで，「道路＝アメリカ」（160 頁）の色彩が濃厚な濃尾平野の真ん中で，農家の長男として暮らしてきた。他方で，社会主義との関わりは決して浅くはなく，評者がブダペシュトに留学した 1988 年から 89 年は，最晩期であったとはいえ，紛れもない社会主義時代であった。

＊

まずは，本書の構成を見ておきたい。

はじめに――政治思想史から見た団地
第 1 章　「理想の時代」と団地
　1－1　団地＝アメリカか？
　1－2　社会主義と団地
第 2 章　大阪――香里団地
　2－1　香里ケ丘文化会議の発足
　2－2　民主主義の追求
　2－3　民主主義の変質
第 3 章　東京多摩――多摩平団地とひばりヶ丘団地
　3－1　60 年安保闘争と中央・西武沿線
　3－2　自治体と闘う――多摩平団地
　3－3　社会主義の広がり――ひばりヶ丘団地
第 4 章　千葉――常盤平団地と高根台団地
　4－1　公団と闘う――常盤平団地
　4－2　女性の活躍――高根台団地
第 5 章　団地の時代は終わったか
　5－1　私化とコミューン化と――70 年代の団地
　5－2　団地の衰退，団地の再生

その構成が示してもいるように本書は，「主に高度成長期にあたる 50 年代後半から 70 年代前半にかけての政治思想を」，「東京や大阪の郊外に建設され」た「団地という空間から考察しようという試み」（全て 14 頁）となっている。

ただ，同じ時期，同じ公団建設の団地，同じ大都市圏，同じ鉄道の沿線等々と，仮にいくつかの変数を同じくしたとしても，現実には，それぞれの団地が直面した問題の内容や解決の優先順位，闘争の形態は実に様々であった。そのことが，第 2 章から第 4 章の個別の叙述によって丁寧に跡付けられてゆく。

すなわち，自治会とは別に「香里ヶ丘文化会議」を持ち，民主主義を追求し，交通問題などに取り組んだ香里団地。駅近で住居環境にも恵まれ，全国の大団地で初の本格的な自治会を発足させ，女性の活躍や革新政党の進出も目覚ましかった多摩平団地。自治会に先立って「むさし野線市民の会」や「ひばりヶ丘民主主義を守る会」などを持ち，保育所問題・西武運賃問題に奮闘するも，団地の狭さと住民の低所得のイメージが定着したひばりヶ丘団地。新京成線の車両や設備の古さ，東京への通勤の便の悪さと格闘し，公団に対する家賃裁判を始め反対運動を度々起こすも，一般に政治活動が低調だった常盤平団地。自治会における女性の活躍が目覚ましく，主婦主体の政治活動も盛んであった高根台団地等々である。

だが，逆に見るならば，形こそ異なれ，団地という共通の「空間」の中で，多摩でも，千葉でも，大阪でも，正に「政治」が生み出されていたのである。そして，それこそが著者の主張する「空間

政治学」の姿であり，「『空間』が『政治』を形成した」（15 頁）顕著な事例に他ならないのである。

しかしながら，団地における「政治」の時代は長くは続かなかった。著者によれば，70 年代に入ると，高島平団地に見られるような団地の巨大化・高層化が進行し，自治会活動の低迷，コミュニティ意識の希薄化，脱政治化，私化が進んでいったと言う。その時代は同時に，高層団地では階段ではなくエレベーターを常用するようになったり，「鉄道やバスのような公共交通に全面的に依存」（244 頁）しないニュータウン型の団地が登場することによって，住民の集う「共通の場」（248 頁ほか）が次第に失われていった時代でもあったと言う。曰く「集合的な新中間階級を意味する『団地族』の時代の終焉と，孤立した密室に籠もる『団地妻』こそが，団地を象徴する記号となる時代の幕開け」（231 頁）の時が到来したのであった。

ここで考えてみたいのが，団地という「空間」が「政治」を生み出していた時代，特に「革新的な政治意識を支える有力な基盤」（17 頁）となっていた時代は，一過性で，一方向に流れ去るだけの時代であったのであろうか，という問題である。

世界史的に振り返るならば，社会主義思想にのっとり，労働者階級のために建設された集合住宅の例は，戦間期のドイツやオーストリア（いわゆる「赤いウィーン」）をその嚆矢とする。旧ソ連や東欧に建設された団地群もこの流れを汲んでいると言ってよいであろう（15〜16 頁や 39〜58 頁）。しかし，それらの言わば思想を具現化しようとしたような団地群と，戦後日本の団地とは根本において性格を異にするというのが，著者の基本的な主張である。「『政治』が『空間』を作り出したのが旧ソ連や東欧の集合住宅だったとすれば，逆に『空間』が『政治』を作り出したのが日本の団地だった」（266〜267 頁）からである。

「団地に残る豊かな自然」（283 頁）に目を奪われたと，原は言う。建設時には，恐らくは，若木であったであろう木々が大木へと生長するほどに，日本の団地においても時が経過したということであろう。しかし，この時の流れの中で，「空間」から作り出された「政治」がさらに別の「空間」を作り出してゆくというような連環，あるいはサイクルが生れ落ちるような瞬間はなかったのであろうか。上に引いた用語を用いて言うならば，「日本の団地」内で生起した運動が，「旧ソ連や東欧の集合住宅」に仮託された意図に連環的につながってゆく機会の存在の有無である。

浅薄ながら，個人的な経験に依って言うならば，「政治」が作り出した「空間」である中欧などの集合住宅には，都市の中心部にありながら，内に緑なども配した中庭を持ち，それをロの字に囲うように各戸が配置され，5〜6 階建ての建物を成しているものも多い。その「空間」で「政治」までが生み出されてきたかは即断しかねるが，少なくともその前段となりうる，人と人との極めて親密な結び付きが生み出され続けていることは間違いない。ここには，「政治」が「空間」を，「空間」が「政治」を，のサイクルが生きている可能性がある。

これと同種の，ないしはこの連環につながるような動きが，戦後日本の団地においてもあったのであるならば，「空間」が「政治」をという，一方向で，しかも行き止まりのようにも思える運動が，その先に次なる「空間」を持っていたことになる。

個人的には，機会があれば，このあたりの可能性について著者に直接尋ねてみたいと思っている。エレベーターや自家用車の登場によって失われたとされる団地の「共通の場」では，かつて，より具体的に，子供たちは何を語り，何を求め，主婦たちは何を嘆き，何を共有していたのであろうか。それは生み出された，次なる「空間」に相応しいものではなかったのであろうか。

この問いは，書評によくある「無いものねだり」などではないし，著者の議論の射程が短いと歎ずるものでも断じてない。なぜなら，一方で評者は，著者の前著『滝山コミューン一九七四』を通して，団地内の小学校という「空間」で，時の「政治」が何を生み出し，少年期の著者がいかなる違和を感じたかも知っているからである。

それでもなお，この問いを著者に投げかけるのは，単線の動きを動きのままとせず，一方向の流れを流れのままとせず，それらを，次なるものが

待ち受ける連環，サイクルとする可能性が，仮に僅かであっても，団地の空間政治学には存在しなかったのかを是非確かめておきたいからである。繰り返しになるが，これは「無いものねだり」の類ではなく，団地と言えば，何よりまず，周囲に新たにできた，赤い瓦屋根の平屋の家屋群を，何の疑いもなく自然に頭に思い浮かべて少年期を過ごしてきた，地付きの農民の倅の無知と単に素朴な好奇心に由来するものであることを改めて断っておきたい。

「あとがき」の末尾で原は，行き止まりになっていた，滝山団地を横断する滝山中央通りは，「実はもともと行き止まりではなかったのではないか」(285 頁) と自問する。その道は，もしかして，評者のこの問いに対する答えに続いていたのではないか――そう考えることは，もちろん僭越の誹りを免れまい。でも，なぜか，そう信じたい。